

有功会員 岩永貞三先生を悼む

本会有功会員 岩永貞三先生のご逝去は、まことに痛惜にたえず会員一同を代表して、ここに謹んで弔意を表します。

岩永先生は、大正10年明治薬学校をご卒業され、ただちに薬剤師となり、昭和13年北支に渡り、北京薬業組合長をはじめとする北支薬学関係の重責をはたし、昭和19年帰国後万有製薬株式会社常務取締役資材部長に就任、同監査役を経て相談役として現在に至るまで、実業人・薬学研究者として、今日の抗生物質工業の基礎づくりに活躍されました。

他方、明薬学園の理事、次いで副理事長、理事長として明薬学園の発展への寄与を通じて私学のひいては薬学教育の振興発展に著しく寄与されました。かたわら、岩永先生は多忙の身をも省りみず本会のため、昭和34年、監事に、昭和36年には日本薬学会図書館建設準備委員として、次いで同建設委員、総務委員、実行委員、会館運営委員として、同館の建設運営に十有余年間にわたり格別の尽力をなされました。特に監事として第二次大戦後の学会の復旧期において学会財政の確立と会計指導に献身的に尽力される等学会事業の遂行に指導的役割を果され、本会の発展に著しく貢献されましたことは会員一同心から感謝を捧げるところであります。

これ等の功績に対し微意を表するため、本会は、昭和43年有功会員に推挙し、昭和44年功労賞を贈呈した次第であります。

なお末長く先生のご指導を仰ぐべきところを今や幽明その境を異にしその術もありません。ここに先生をお送りするにあたり会員一同先生の御遺徳を偲び御冥福を祈る次第であります。

昭和51年3月9日

日本薬学会 会頭 高 木 敬 次 郎

岩 永 貞 三 氏 を 偲 ぶ

岩永貞三さんと言えば万有製薬のお偉い先輩であると言うことでしか知らなかった。昭和十六年北支の北京で応召されたばかりの一兵士だった私を心から歓待して下さったのが私との最初の出会でした。それから三十五年経った今日明薬学園理事長の重責を岩永さんから受け継ぐとは夢にも思っていなかった。

昭和二十八年頃だったと思う。丁度私が明薬の講師をしていた頃、学園の理事だった岩永さんに大学でよくお目にかかり学園将来の抱負をしばしば聞かされたものでした。その時から岩永さんのお人柄について学問に対する見識の豊さと理解のあるお方だと尊敬しておりました。

四年前岩永理事長より理事就任のご要請があつて以来、初めて学園に関係を持つようになった私には岩永さんの体力の衰えをお会いする度毎に感じていただけに悪い病魔にとりつかれていなければよいがと、ひそかに祈り申し上げておりました。殊に晩年の昭和五十年の末期頃から、どうもご様子が普通でないと感じとった私は叙勲も受けられたことでもあるし、これ以上学園理事長としての重責を負われることは学園の為にも先生個人の為にもご無理と思い、ご辞任の上静養されるよう幾度かご忠言に及びましたが、このことだけは遂に聞き入れて下さいませんでした。これも学園将来の事を思う母校愛からだったと思います。

元来大変勝気で精細なご気性であられただけに、余り他人の言うことに耳をかさないお人でしたが幸い理事になるまで学園と余り関係がなかった私の言うことだけはすなおにお聞き入れ下さったものでした。それもご長男の貞昭君は私の愛弟子の一人であり、過日IUPACの総会がストックホルムで催され時、津田恭介先生と私はその頃当地に留学中であったご長男夫妻のお宅で大変なご歓待を受け夜が明けるまで語りつづけたことなどもあつて故人は私に何事も心を開いてお話して下さっただけに、今更ながらかえすがえすも残念に思う次第です。

ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

学校法人 明薬学園理事長 石 井 輝 司